

湘南紳士録 (26)

赤木愛太郎先生生誕百十五年

備前焼の魔力



荒 間 蒼 海

嘉納校長から受けた影郷

先生が、岡山県の片田舎で生をうけたのが明治6年
奇しくも全国津律捕部に小学校が誕生した年。16歳で
高等小学校卒業。都役所で受けた準教員の試験は、坊
群の成績、見こんだ郡長の勧めで、師範学校へ進学。

嘉納校長の修身は『何くそ』の

[illegible]

南に北に遍歴時代

卒業して奉職したのは鳥取県立第二中学校（米子中

。一年半にして沖繩師範に転じた。明治

山形師範の教頭

新潟女子師範学校長

山形師範8年間の後、大正8年、46歳の新潟の女子
 教育校長と、この平均的な2年間に、過去4代にわた
 る教員実践と、裏付けとなる教育理論の集大成につ
 づめた。研究録は広範なものになったのだが、発表す
 るようなことは、切ない先生が生んだ。

大正10年3月、29名の卒業生の希望を地を聴いて
 親身に世話をしていた校長室に、文部省から電報、神
 奈川県の新設中3校、転任のゆめ。正に青空の雲霞、文
 部省直轄の師範学校長の安定した地位を誇示するた

前焼の魔力

3月18日藤沢駅に到着した赤木一家を迎えたのは、金子町長と村田君も一人の八。丘の上へ上ると旧松倉大橋。先にも生徒も八。藤沢小の校舎と校舎の間に机も椅子も鏡で借り物、開校準備の事務員が唯一。人財産など。木箱一つに校名印一つ。知り人もく、地理不案内、砂漠のまん中からひり出されたような思いに、さすがの先生も思わず落子一筋。失礼。しかしこんな事で、「負けてたまるか」の男一匹赤木大郎 48歳

天の時、地の利、人の和

物は儒學の專弄特許たが、岡田生春の古裡は佛前焼
タ九つ校長の古裡 湘中生の愛語数文歌。理の置き
弟と、藤沢高堂平塚藩の質朴な生徒が目白織りなす
文眞彬彬の人の和。天地人揃った湘南丸の航行に、赤
木船長の意欲的な操縦。

九つ校長の古裡

めの素朴な風合いは、先生の赤黒い膚で、格下った無表情な面持ちは、不思議に人を魅了

さて、眼れるが如き黒い「眼」は、万事見通し、清濁を見極めて、心にも出さぬ根柢。この理には、眉に比して、つよく、用ひて心に用心を重ねても、つつしい魔力に引かれ、かつ、つよく格の違ひを自ら致さる。

中学諸教の苦悶20年、悲願達成した地元の学校へ帰る時期は甚だ大。有志連、一も二もなく偏面たる魔力の校となり、物々兩隣の肩入れ。万事新説の新設。校の不自由は、せりぬくことと父兄会を組織して応援。深刻な不況下に資金を費して運動場の監用地でも購

校長の語見情熱にほれこんだ父兄や有志に
織の『三色会（アカ・キ・アイ）』は、校

分組授業

図画・理科にも採用

篤学の松川先生が第4代校長となり、見事な殖産の藍江
先生の發刊コロンビヤを牽引すること、湘中の英語教育は
ますます盛んになり、昭和10年、文部省内英語研究主権
の授賞史實であり、湘中に自派の欠け、晴
雲の本は加藤先生（北陸高校）。英語の教育状況の説
明は、松川先生。当日大文壇堂を埋めた観客者

松川教授と岡倉貴

の感銘を与えた」と

學習の要は反復練習にあり、不消化で進むべからず昭和3年から、國漢學科の4科目を順次に火曜日のうちに修了し、翌年春に國漢の2科目を同時に修了して、翌14年第1回受賞校の栄を担った。

方が負担し、翌4年からは火曜日まで続いた。

創立以来の土曜午後の全校マラソンは、昭和3年に「対組競技」に発展的解釈。更に工夫が凝らされて、4年頃から「自由運動」を時間割に組み入れて、各自選んだ運動項目を毎週練習。この活動が49年から決定的な全校クラブ活動の一運動部門を、赤松校長は

前に着想実施していた。

昭和3年、御大興の記念事業について、生徒の希望を調査し、予想通りブリーと出た。建設費は、生徒は月給を減らし、職員は月俸の1/10を積立てて10年計画、10年は秋の豊作の受太郎。校長の熱意に打ち動かされて、そこは晩年の愛大郎。資料の提供者も出て、計画を8年短縮されて、5年夏の夏休みに振る。全校職員以外の手作業は5年間にして、農具上手に、振板・鉄釘・足場以外の作業は5年間にして生徒の手で夏休中続けられ、延べ3千人の心を飽かす。

沢町には水道がない。水脈は絶望と
しからばと、理科の大滝・久保田・

苦心慘愴の体育館建設

持彭頭が奔走し、11年7月、15周年記念事業に竣工。工事費4万円。

創立の翌大正11年4月学園に入れた(自號「一筋」)詩人をたたく富士の機軸を象徴。「日本」の詩を撰ぶたたく富士の「アイデア」である。知短体三位一位の調和のとれた人間育成を「三才公発揮」「質実剛健」「勤労力行」「和衷協同」立身報國」の五つの校訓を、反復訓話するので生は「一五七条の御書文」と尊称した。

學習院
屬託

戦艦暗く立ちこめて、赤木理念を展開しようにも
すまず決められた時、学習院院長山梨海軍大將が
観ることに、聞くほかに、赤木校長に催ひ、皇
が、御学問所定の慣例を破って学習院に恒例、皇
が、院長の助言役を引き受けたいと懇請。
2月、宮内省御令で、「学習院嘱託」を以て、
章入りの恩賜の御菓子を、自宅には着らず、学校
に揃ひ、職員一同と喜びを分かち合った。

[illegible]